

令和元年5月11日現在

機関番号：34603
 研究種目：基盤研究(A) (一般)
 研究期間：2014～2018
 課題番号：26244042
 研究課題名(和文) 文字文化からみた東アジア社会の比較研究

研究課題名(英文) Study of Eastern Asia Society Culture

研究代表者

角谷 常子 (SUMIYA, Tsuneko)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：00280032

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 27,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は主に石刻資料を分析し、日本・中国・韓国各国の社会関係や人的結合関係の特色を探り、特に日本については刻石文化が根付かなかった理由を解明せんとした。

主要な成果のうち2点を挙げると、一つは、石には「共同」の意識が込められていることである。例えば取り決め事を刻した石は、内容を周知し、その有効性を示す証拠となる。そしてたとえ官の主導で取り決めたとしても、そこには「共同」の意識や建前が根底にある。もう一つは刻石の理由には社会変動の大きさと流動性の高さがあることである。立石は記録の改変・消滅への対策ともいえる。従って日本に刻石文化が根付かなかった理由はここに求めるべきだと認識した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代ギリシャのみならず、皇帝支配下の中国でも「共同」が求められたことは、人々の問題解決のあり方や支配のあり方に再考を促すであろう。また石を立てる「行為そのもの」を考察対象としたことは、他の問題についても有効な分析方法となると思われる。

日本に刻石文化が根付かなかったのは社会変動・流動性の低さによるということは、他の文化的・社会的事象や現代社会を考察する上でも留意する要素であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The following are two principal findings. Firstly, while a stone may be raised for a variety of reasons, I could verify that it sometimes necessitates a “communal” awareness. For example, a stone inscribed with matters agreed upon is evidence that its contents are common knowledge and in effect. There was an awareness that required “communality” also in cases where the decisions were made under the leadership of officials, even if only ostensibly so. Secondly, I found that one reason that a stone inscription culture did not take hold in Japan can be traced to the social context of great social fluctuations and fluidity. I perceived that the social context is a more fundamental cause than physical factors such as stone processing technologies and literacy rate.

研究分野：中国古代史

キーワード：石刻 文字文化 東アジア

1 研究開始当初の背景

代表者は、日・中・韓三か国の影響関係と各国の独自性を解明するため、共有する木簡と文書行政という切り口が有効と考えた。しかし、国によって木簡の年代が異なるため直接的比較ができない。そこで先の科研において、直接的比較対象物に頼らない比較研究を可能とする視覚を検討した。その結果、「行為」「現象」という新たな分析視覚を得た。そして本科研では、人的関係・社会関係が表れやすい石刻資料を主たる分析対象として、石を立てるという行為の意味とその背後にあるものを比較検討することとした。またこうした研究方法によって、日本に刻石文化が根付かなかった理由にも迫りうると考えた。

2 研究の目的

日本・中国・韓国における文字文化を通して、その背景にある社会を比較研究し、各国の影響関係とともに独自性を明らかにするのが目的である。木簡の如くモノ同士の直接的比較ではなく、「行為」や「現象」を比較することで真の比較研究を可能にせんとした。「行為」「現象」の比較とはつまるところ社会の比較である。そのため社会性の強い石刻資料を主たる分析対象とし、立石の場、立石に至る背景、立石した人々、当該地域の事情などの考察から、社会的特色を浮かび上がらせることが目的である。そしてもう一つ日本に刻石文化が根付かなかった理由を解明することも目的である。石を必要としなかったという社会的視点が必要で、それを中国・韓国において刻石を必要とした状況を明らかにすることによって浮かび上がらせることを企図した。

3 研究の方法

研究組織は角谷を代表者として、国内から7名の研究分担者、3名の連携研究者、中国、韓国、イギリスから7名の研究協力者が参加した。分担は次の通り。(1)中国の文字文化と社会研究 (2)日本の文字文化と社会研究 (3)韓国の文字文化と社会研究

研究方法として個別研究・全体研究会・現地調査の3つの柱がある。個別研究は各自が適宜関連研究会や講読会などへの参加を通して自らの分担分野における研究を進めた。全体研究会は、毎年3回程度全員が集まる研究会で、研究発表と、外部の研究者を招いた勉強会を開いた。また現地調査として基本的に1年に外国1回、国内1回文字資料の出土地調査や実物の熟覧を行なうとともに、現地の研究者との学术交流を重ねた。さらに中間報告としてロンドンにてシンポジウムを開催した。そして最終年度には研究成果の社会還元と外部評価を得る目的から、一般市民向けの公開シンポジウムを開催し、5年間の成果報告である論文集のとりまとめの準備をした。

4 研究成果

(1) 日本古代における刻石文化の低調と不継承の理由に1つの答えを示したこと。

古代日本には刻石が少なく、しかもその文化は継承されていない。その理由として従来指摘されてきた識字率の低さや石の加工技術の未熟さだけでは、官人層や中世貴族層にも立碑の風がないことや、優れた石造物が存在することが説明できない。この問題について

市大樹氏は、社会的流動性の低さゆえに石に刻む必要性が乏しかった。わずかに残る古代の刻石は、中国文化を吸収するとともに朝鮮半島の強い影響も受けていた時期のものだと考えた。一方渡辺晃宏氏は、文字による意志伝達文化のなさ、換言すれば根強い口頭伝達文化によるとする。いずれも単なる技術的問題ではなく、日本社会がもつ特質に由来するものと認識している。

(2) 法(広く「取り決め事」と考える)を刻して公示する行為の共通点とそれを生み出す社会の相違を認識したこと。

古代ギリシャにおいて法を刻した石は、単なる掲示板ではなく有効性の証拠物件でもあった。従って刻まれた内容は石が立っている限り有効で、破壊されると無効になった。同様の事象は中国における水利碑や後漢時代の約束刻石、さらに朝鮮半島にもみられる。かように地域や時代は違っても、法を石に刻す意味、石が担った役割には共通するものが確認できる。だからといって石に刻んだ集団や社会の性質は同じとは限らない。ただそこには共同の必要性という共通項はありそうである。例えば中国における水利碑や約束石の如く、建前にせよ「共同」という性質が意識され必要とされる場合に石が立つといえる。

(3) 石と場の関係の再認識

石は場と深い関係にある。こうした場との関係を意識すると、新しい解釈が生まれることがある。例えば、始皇帝が誰も見ない山の上に石を立てたのは、神に向けたものだからとの理解がある。しかし占領地の聖山に新たな支配者が来て祭祀をした証拠を残すことが必要だったとするならば、祭祀の場でもある山上がよいはずである。一方朮山明氏は場を「コンテクスト」ととらえ直す。支配が不安定な入植地というコンテクストの中では、長官が行なう人事異動や復除の実施過程を刻んだ石は、当地が王朝の統治下にあることを示すものとなる。同様に、新獲の領土に立つ始皇帝刻石も、征服地の人々と祖霊への布告、と理解される。場やコンテクストは石の意味に大きく影響するのである。

(4) 直接比較する対象がない場合の比較研究の可能性の提示

刻石が非常に少ない日本と、いかに比較研究するか。これも大きな問題であった。その手段として結局は、石刻が豊富な地域について、立石の背景や意味を徹底的に追究することしかない、ということになった。存在理由を突き詰めることで、不存在の理由の候補を得ることはできる。もちろんあくまで候補でしかない。しかし確信したのは、「存在しないものとは比較できない」という批判は当たらない、ということである。「無」も一つの存在形態である以上比較の対象になりうる。いやそれこそ研究すべきなのである。

(5) 国際シンポジウムの開催

中間報告の場として、ロンドン大学 Senate House で国際シンポジウム「Law and Writing

Habits in the Ancient World」を開催した。研究班から藤田高夫、佐川英治、李成市、渡辺晃宏、栗原麻子、竹内亮の6名と、外国から Jan-Mathieu Carbon(University of Copenhagen 発表当時の所属)、Charles Crowther (Oxford University)、Michel Gagarin(University of Texas)、Esther Edinow(The University of Nottingham)の4名が研究発表を、市大樹、角谷常子、Lene Rubinstein(Royall Holloway, University of London)、Adele Scafuro(Brown University)の5名がコメントを行った。アジアの刻石に認識の乏しい外国人研究者との議論には懸念があったが、予想に反して反応は良好であった。シンポジウムの発表内容をもとにした研究成果は報告書『古代東アジアの文字文化と社会』としてまとめた。

5 主な発表論文等

[雑誌論文](計13件)

角谷常子 「後漢時代の刻石流行の背景」古代東アジアの文字文化と社会、査読無、2019、61～86

市大樹 「石碑からみた日本古代社会」古代東アジアの文字文化と社会、査読無、2019、8～42

市大樹 「木簡の視覚機能という考え方」古代文化70巻3号、査読無、2018、57～63

寺崎保広 『『類聚三代格』にみえる「榜示」小考』古代東アジアの文字文化と社会、査読無、2019、242～259

渡辺晃弘 「文字媒体とその機能 日本における石碑文化の継受をめぐって」古代東アジアの文字文化と社会、査読無、2019、43～60

李成市 「集安高句麗碑からみた広開土王碑の立碑目的」古代東アジアの文字文化と社会、査読無、2019、175～196

佐川英治 「6世紀河北農村の慈善活動と石柱建立 標異郷義慈恵石柱再考」古代東アジアの文字文化と社会、査読無、2019、106～132

藤田高夫 「石刻による宣示 漢代石刻と「場所」」古代東アジアの文字文化と社会、査読無、2019、87～105

伊藤敏雄 「西晋五条詔書等の伝達・頒布をめぐって」古代東アジアの文字文化と社会、査読無、2019、226～241

市大樹 「日本古代木簡の資料的特質 廃棄論・機能論・形態論の視点から」歴史学研究、査読無、2017、2～13

角谷常子 「漢代墳墓祭祀画像における死生観研究の現状」中国史学26巻、査読有、2016、91～107

李成市 「朝鮮古代法制史の現状と課題」法制史研究65、査読有、2016、53～77

市大樹 「黎明期の日本古代木簡」国立歴史民俗博物館研究報告194、査読有、2014、65～100

[学会発表](計15件)

- 市大樹「日本の7世紀木簡からみた韓国木簡」韓国木簡学会、2018
- 藤田高夫「The Models of Proclamation in Inscription」Law and Writing Habits in the Ancient World、2016
- 寺崎保広「木簡と文書の世紀」万葉学会全国大会、2016
- 渡辺晃宏「Media for transmitting information in Japan and the tradition of inscribing stone」Law and Writing Habits in the Ancient World、2016
- 李成市「The King Kwangget'o Stele Inscription as an Inscribed Document」Law and Writing Habits in the Ancient World、2016
- 角谷常子「中国古代の史をめぐる」新出簡牘資料による漢魏交替期の地域社会と地方行政システムに関する総合的研究」研究会、2015
- 伊藤敏雄「楼蘭魏晋簡の再検討 楼蘭魏晋簡の分類と書式等の諸問題」国際学術シンポジウム「後漢・魏晋簡牘研究の現在」、2015
- 佐川英治「中国古代の都城プランと天の祭祀 / 古代東アジアの都城の理念」木簡学会、2015
- 市大樹「紙木併用時代の日本古代木簡」歴史与文化：晋洲史中的日本古代国際検討会、2015
- 李成市「韓国出土の『論語』木簡について」台湾政府科学技術部主催「日本思想史ならびに文化と『論語』」研究会、2015
- 市大樹「木簡からみる文化交流 国の成り立ち、文字の成り立ち」第2回古代歴史文化賞受賞作決定記念シンポジウム、2015
- 角谷常子「中国古代の「書記官」」東洋史研究会大会、2014
- 佐川英治「北魏末の北辺社会と六鎮の乱 楊鈞墓誌と韓買墓誌」国際学術シンポジウム「石刻史料から見た魏晋南北朝史 北朝史を中心に」、2014
- 佐川英治「中日比較文化研究」2014年国家外専項目・学術專題系列講座、2014
- 李成市「石刻文書としての広開土王碑文」好太王碑建碑1600周年国際学術会議（中国社会科学院・韓国東北アジア歴史財団共催）、2014

〔図書〕(計8件)

- 角谷常子 (編著) 古代東アジアの文字文化と社会、奈良大学、2019、287頁
- 李成市 闘争の場としての古代史 東アジア史のゆくえ 岩波書店、2018、401頁
- 市大樹 日本古代都鄙間交通の研究 塙書房、2017、686頁
- 角谷常子 (共著) ジェンダーの中国史、勉誠出版、2015、295頁
- 佐川英治 中国都市論への挑動、汲古書院、2016、420頁
- 李成市 歴史をひらく 女性史・ジェンダー史からみる東アジア世界、御茶ノ水書房、2015、260頁
- 伊藤敏雄 (共著) 湖南出土簡牘とその社会、汲古書院、2015、250頁
- 市大樹 (共著) 日本古代の国家と王権・社会、塙書房、2014、534頁

6 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：藤田 高夫
ローマ字氏名：FUJITA, Takao
関西大学・文学部・教授
研究者番号：90298836

研究分担者氏名：伊藤 敏雄
ローマ字氏名：ITO, Toshio
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：00184672

研究分担者氏名：寺崎 保広
ローマ字氏名：TERASAKI, Yasuhiro
奈良大学・文学部・教授
研究者番号：70163912

研究分担者氏名：渡辺 晃宏
ローマ字氏名：WATANABE, Akihiro
奈良文化財研究所・その他部局等・副所長
研究者番号：30212319

研究分担者氏名：市 大樹
ローマ字氏名：ICHI, Hiroki
大阪大学・文学部・准教授
研究者番号：00343004

研究分担者氏名：李 成市
ローマ字氏名：LI, Sonnshi
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：30242374

研究分担者氏名：佐川 英治
ローマ字氏名：SAGAWA, Eiji
東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授
研究者番号：00343286